

臨床工学技士に

薦める

今月の 冊

「感染症の世界史」(角川ソフィア文庫) 石 弘之 [著]

2018年8月1日にAFP通信(社)電は「コンゴ民主共和国の保健省は1日、東部の北キブ(North Kivu)州でエボラ出血熱が流行しており、20人が死亡したことを明らかにした。コンゴは1週間ほど前に、北西部でのエボラ出血熱の流行について終息を宣言したばかりだった。」と報じた¹⁾。エボラ出血熱はリスクグループレベル4ウイルスの1つであるEbola virusを病原体とする急性感染症で、発症後の致死率は50~80%とされ、救命できたとしても重篤な後遺症を残すことがある。西アフリカでは2013年12月ころから流行し始め、2014年6月ころから感染が急拡大して深刻な事態となった。WHO(World Health Organization)の発表によると、2015年10月までに28,512名が感染し、11,313名が死亡(死亡率40%)した。2016年1月14日、WHOは西アフリカで確認されたエボラ出血熱大流行の終息を宣言していた。しかし、コンゴ民主共和国では、1976年にエボラウイルスが発見されてから今回は9回目の流行であり、まさに人とウイルスとの戦いは「いたちごっこ」の状態が続いている。

微生物は、深刻な感染症の病原菌として人類にとってほぼ「最大の天敵」であると同時に、動物の消化吸収をはじめ、発酵食品、創薬、環境浄化、共生など、土壌生態系で人類の生存を助ける「強力な味方」でもある。その微生物とヒトが絡み合った感染症の歴史を、我々医療従事者が基本的知識としてもつことはきわめて重要なことである。

医療従事者にとって、感染症は日常的に最も深刻な問題の1つである。特に外科領域では、どの診療科も感染症と関わらない日はないといっても過言ではない。しかし、そうした感染症との日々の闘いのなかで、少し立ち止まり、「我々の闘っている相手であるウイルスや細菌をはじめとする病原微生物が、どのような生い立ちをもって現代に

至っているのか」を考えることも、感染症との闘いにとっては必要ではないだろうか。

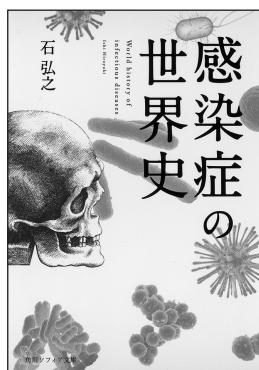
本書は、まえがきの書き出しが、「医学の発達によって感染症はいずれ制圧されるはずと多くの人は信じてきたが、実はそうではなかった。1980年にWHOが人類を最も苦しめてきた天然痘の根絶を宣言したが、入れ替わるように『エイズ』『さまざまな新型インフルエンザ』『エボラ出血熱』『デング熱』『西ナイル熱』といった予防法も治療法もない新旧病原体が流行し、撲滅したはずの結核までも息を吹き返している」との現状認識からスタートする。人類の歴史は、「天然痘、ペスト、結核、麻疹、風疹、コレラ、チフスなどの感染症の大流行」との戦いの歴史でもあり、現代人はその戦いの中で生き残った「幸運な先祖」の子孫ということになる。動物学者CR Dawkinsの「利己的遺伝子」説、すなわち「ヒトも病原微生物も、種の遺伝子を残すために生存と繁殖に努めている」という意味では、人類の「防疫体制の強化」や「抗生物質など抗菌薬物の開発」「自己免疫力の賦活」などの努力に対して、病原微生物は「薬剤耐性の獲得」「より強い毒性をもつ品種へ進化」を遂げようと努力し、まさにヒトと病原微生物の「軍拡競争の歴史」が「感染症とヒトの闘いの歴史」ともいえる。感染症の大流行の背景には、「定住生活」「都市の過密化」「人類の移動と交通機関の発達」「食肉大量生産」「ペットブーム」「熱帯林の開発などによる自然破壊」が密接に関連し、「人災」の要素も多分に関与している。

感染症とヒトの絡み合った歴史を、我々が日常報道でよく耳にする感染症をとりあげ、環境史の立場から論じている本書は、医療人の教養書として一読する価値がある。

(東京都健康長寿医療センターセンター長
許 俊鋭)

■文献

- 1) AFP BB NEWS「コンゴ民主共和国でエボラ出血熱が再発、20人死亡」、2018年8月2日



KADOKAWA
384 ページ
2018年1月発行
定価：本体 1080 円(税別)